

## 新女性朴仁徳における「近代」・「民族」・ 「ジェンダー」・「親日」

井 上 和 枝

キーワード：朴仁徳，新女性，近代，民族，ジェンダー

### はじめに

新女性研究は、解放後の韓国社会の発展と成熟と課題を最も鮮明に反映する研究テーマである<sup>1</sup>。新女性研究を振り返ってみると、いくつかのタブーが存在していたと言える。まず、第一はジェンダー的タブーである。同時代の朝鮮社会のジェンダー意識—それは主として男性知識人のそれであったが—を反映した新女性は「逸脱、放縦、虚栄、奢侈」という形容とともに用いられることが多く、このイメージは解放後にも影響を与え、長い間、新女性は研究対象とされなかった。しかし、現在、新女性研究は韓国においてはひとつの流行である。韓国社会における民主主義の発展と男女平等のためのたゆみない努力が反映された結果である。1990年代以後生み出された新女性関連の論文は歴大な数に上る。内容においても、最初は民族意識の限界や欠如という理由から否定的評価や限界の指摘が主流であったが、新女性研究の流れはその後変化した。

最近の新女性研究は、フェミニズムや女性主義という新たな視点から、新女性のイメージを問題にするなど、多様な観点が導入されている。ジェンダータブーは完全に克服された感がある。

しかし、新女性研究には、ジェンダータブーだけでなく、韓国社会のその時々状況を色濃く反映した社会主義系新女性タブー、その後の「親日派」タブーがあった。社会主義系新女性タブーは、韓国の政治的変化のなかで解消されつつあるが、「親日派」タブーが克服されるのにはまだ時間が必要であろう。そのために、1920～30年代の朝鮮社会で新女性の代表と見なされていた朴仁徳に対する研究はきわめて不振であった。つまり、当時の社会にあった否定的な新女性イメージのために研究がタブー視され、その後新女性研究が盛んになったにもかかわらず、「親日派」研究の進展の中で、「親日派」と見なされた朴仁徳は研究から疎外されたのである。

<sup>1</sup> 韓国・日本における2000年までの新女性研究の流れについては、拙稿「朝鮮女性史における『新女性』研究の新たな動向」（『国際文化学部論集』2、鹿児島国際大学国際文化学部、2000年10月）参照。

本稿で朴仁徳を扱う理由は主として二つある。先ず新女性研究をふたつのタブー、すなわち、新女性研究そのもののタブーと「親日派」タブーから解きほぐすのに、朴仁徳は最も適切な題材を提供するからである。

もうひとつは、朴仁徳の新女性としての歩みをたどると、「近代」との遭遇と受容、ジェンダー意識、民族運動、親日行動など、新女性研究の中で主題として扱われたテーマがすべて関わりからみあっているからである。朝鮮における新女性の経験は、植民地の歴史的变化の中で、固定的ではなく、変化し流動していく。一人の人間の中で、「民族意識」も「ジェンダー意識」も別々に存在しているのではなく併存しており、「民族」運動と「親日」的行動も連続線上に連なっている場合が多く、ある時期のみを取り出して、断定的評価を与えにくい。そのような意味で朴仁徳の新女性としての経験は、新女性の多様な生と行動を考える好個の素材となるであろう。

朴仁徳に対する研究は、主として2000年代に入って行われるようになったが、先ずそれ以前に出た姜貞淑の「朴仁徳 皇国臣民になった女性啓蒙運動家」に触れることにする<sup>2</sup>。99人の親日派の一人として叙述されたために紙面の制約が多かったと考えられるが、朴仁徳の親日的行動を中心に述べている。ちなみに、「親日派99人」の中に入れられた女性は、金活蘭・高鳳京・黄信徳・朴仁徳の4人である。

姜貞淑は、朴仁徳の行動と思想を、知識人女性中心の女性団体行動という限界、日帝との闘争的観点欠如と評価し、そうした性行が3・1運動の時からその後の運動にも継続しており、後日の反民族行為に結びつくという。

新女性として早くから世間に注目された朴仁徳は、新聞や雑誌にたくさんの関連記事が掲載されているが、キムウクトン「朴仁徳の伝記と関連した誤謬」では、記事をそのまま引用した研究に伝記的な誤謬があることを自伝と対照しながら指摘している<sup>3</sup>。誤謬とされているのは、出生年・出生地・死亡年・受けた教育課程（初等教育・米国留学先大学）などの基礎的な伝記事項に始まって、結婚から離婚に至る過程をめぐる誤謬、朴仁徳の社会的行動の性格にまで及ぶ。また朴仁徳の社会的行動の性格については、論文題目で意図された事実の確認を越えて、筆者の評価が提示され、朴仁徳の独立運動は譲歩的であるとし、植民地末期の日本語学習や徳和女塾運営、臨戦対策協議会や朝鮮言論報国会での活動の親日性を厳しく批判する。その一方で、朴仁徳が多分野で活躍したことを評価し、翻訳家・文筆家としても認め、特に、英語で3冊の自伝を書いて韓国系米国文学発展の礎石となったことを特筆するべきとした。英文の3冊の自伝とは、“September Monkey”（『九月の猿』）<sup>4</sup>・“The Hour of the Tiger”（『虎の時』）<sup>5</sup>・

<sup>2</sup> 『親日派99人』2, 反民族問題研究所, 1993年。

<sup>3</sup> 『東亜研究』30-2, 西江大学校東亜研究所, 2011年8月。

<sup>4</sup> New York: Harper & Brothers, 1954, チェヨナ他訳『九月の猿』, 図書出版チャンミ, 2007年。

<sup>5</sup> New York: Harper & Row, 1965, 韓国語訳『虎の時』仁徳大学校, 2007年。

“The Crow Still Crows”（『あかつきのめんどりはまだ鳴く』）<sup>6</sup>である。その中で“September Monkey”に関して、キムウクトン「朴仁徳の『九月の猿』—自叙伝を越えて」は、『九月の猿』を中心に朴仁徳の経歴と女性教育家・女性運動家としての業績を論じた後、朴仁徳の自叙伝は暗い過去に対して言及せず隠蔽していることを指摘する<sup>7</sup>。暗い過去すなわち、1940年代に入って本格化する親日的行動について明らかにした上で、これと解放後の米軍政に積極的に協力したことをもって、彼女の行動は機会的で偽善的であるとも評している。しかし、『九月の猿』という自叙伝そのものに対しては、一人の女性が女性運動家に成長する個人的な生と家族・友人をとりまく「小叙事」とどまらず、20世紀前半期の民族と国家という叙事に拡大したこと、米国における女性移民作家輩出の牽引車になったことを高く評価している。

具完緒「朴仁徳の生涯と思想」は、この自叙伝を主材料にして書かれたものであるが、同時代資料を参照していないようで、固有名詞が正確ではない<sup>8</sup>。また、朴仁徳が設立した大学の在職者という著者の立場から、彼女の生涯を全肯定的に描いている。これは現在、朴仁徳が「親日派」という烙印を押されているため、彼女の行動を弁護する意図も含まれているのであろう。

朴仁徳を含めた植民地期新女性の米国体験に関する研究には、金英一「植民地時期新女性の米国体験と文化受容—金マリア・朴仁徳・許貞淑を中心に」<sup>9</sup>がある。3人のアメリカ体験とそれに基づく観察から、米文明の受容のしかたとその後の活動を論じている。朴仁徳に対しては、米文明に簡単に適応しただけでなく精神的に没入し理想化したが、朝鮮に対しては憐愍と同情を感じ、それが後の親日行為という実践的帰結をもたらしたと述べる。

姜貞淑と同じく、朴仁徳の親日行動を扱ったのが、金ジファ「金活蘭と朴仁徳を中心に見た日帝時代キリスト教女性知識人の『親日的』脈絡研究」であるが<sup>10</sup>、日帝への協力は転向の結果というよりは変化する社会状況に対する多面的な抵抗と協定の過程ととらえ、在朝鮮日本人女性の植民主義的朝鮮介入運動と提携しながら、自身の主張を介入させ、社会的活動空間を確保し、朝鮮女性への教育という生涯の夢を実現させていく過程とみなした。

本稿は、朴仁徳に関する当該時期の新聞・雑誌記事と彼女の自叙伝“September Monkey”を資料とし、朴仁徳において欧米の文化という「近代」受容がどう行われ、彼女の人生をどのように決定したのか、国内・海外における彼女の民族運動、結婚・離婚と社会的反応、職業女性や農村女性に対する啓蒙運動、植民地末期の総督府への協力を扱い、朴仁徳という新女性のなかで、「近代」、「ジェンダー」、「民族」がどのように共存し、それらと「親日」行動とはどのような連関を持っているかを検討する。

<sup>6</sup> New York: Vantage Press, 1977.

<sup>7</sup> 『ローカルテイ人文学』、釜山大学校韓国民族文化研究所、2010年4月。

<sup>8</sup> 『大学と福音』13、2008年12月。

<sup>9</sup> 『韓国文化研究』11、梨花女子大学校韓国文化研究院、2006年12月。

<sup>10</sup> 梨花女子大学校女性学科碩士論文、2006年1月

## 第1章 朴仁徳の「近代」受容

### 第1節 朴仁徳の生い立ち

本節は主として、朴仁徳の自伝『九月の猿』、『私の自叙伝』<sup>11</sup>、『写真自伝 波乱多き私の半生』<sup>12</sup>を中心に、尋問調書や当時の新聞・雑誌の関連資料を使ってまとめる。

朴仁徳は1896年鎮南浦から西に約5キロ離れた小村、すなわち鎮南浦府億両機里<sup>13</sup>で、儒者の父朴永河と文盲の仏教徒の母金溫柔との間に生まれた。7歳の時、この地方を襲った伝染病のコレラのため、父と弟を失って、母と二人残された。未亡人になった母に朴門中の家父長である祖父の兄が主導して、「最も近い親戚の中から男子を選んで故人の相続者に決める」という決定を下した。それはその相続者に母が従わなければならないことを意味した。母は悩んだ末に自分のいとこの勧めで教会に通い、この苦境をいかに切り抜けるか道を模索したが、父の親戚は新しい信仰を放棄しなければ追放すると迫った。母はついに幼い娘をつれて、いとこを頼って、龍岡に引っ越した。

龍岡で、母は娘を教育させるため、自分の甥の一人が訓長である書堂に通わせた。30円と衣類の包み一つを持って、婚家を出た母であったが、男の子のように娘を教育するという固い意志を有していて、男子しか通えない書堂に娘を入れるため、男装させ名前も「任徳」から男子に多い「仁徳」に変えた。

男児に混じって男装の朴仁徳が漢文の勉強をしていたとき、鎮南浦に初めて女学校が開校された。監理教宣教師によって、三崇女学校<sup>14</sup>が作られたのである。朴仁徳の母は娘の男装を止めさせ、この学校に通わせることにした。ここで彼女は第一期生として、尹心恵・聖徳姉妹と金一葉と肩を並べて勉強した。同級生20余名の中に、奇しくも後に新女性として世間に名前をとどろかせた女性たちが集まっていたのである。朴仁徳はようやく女学校に通えることになったが、他の学生とはことなり、雑貨の行商をして暮らしを支える母と別れて学校で自炊をしながら学んだ。

12歳で三崇女学校を卒業した朴仁徳は、さらに勉強をする道を選んだ。彼女は夏休みで帰郷

<sup>11</sup> 『女性』4-3、1939年3月。

<sup>12</sup> 『三千里』1938年11月号。

<sup>13</sup> 3・1運動の時保安法違反事件で捕らえられて警務総監部で尋問を受けた時の調書に記載された出生地である。朴仁徳自身は、億両里（『私の自叙伝』）と書いたり、億両機里（『写真自伝 波乱多き私の半生』）と書いている。おそらくモニャンツル（前掲『九月の猿』9頁）という固有地名で記憶していて、漢字に直したために起こった間違いであろう。

<sup>14</sup> 前掲『私の自叙伝』（38頁）には「三界学校というそれこそ女子を対象に初めてとなる女学校」となっている。しかし、前掲『写真自伝 波乱多き私の半生』では「三崇学校」（208頁）という名称になり、『九月の猿』では「サムソン삼성」（34頁）となっている。前者のふたつは別の漢字が使われており、ハンゲルの音はすべて異なる。この点について、前掲キムウクトン「朴仁徳の伝記と関連した誤謬」では、考証の末、「三崇学校」であるとしている。本稿でもこの説を採る。

した尹心恵姉妹が2学期の開始で学校に戻る時、ついて行って梨花学堂で勉強するという計画を立て、それを聞いた母は情熱に負けて、夫の家からもらってきた30円のなかから旅費を出してくれた。保証人もなく、学費もないという朴仁徳に、梨花学堂の校長は、郷里にもどるよう説得したが、彼女は勉強をしたいという強い意志を示してそこから動こうとしなかった。ついに大学側が折れて、米国の詩人ジャンの奨学金をうけられるようにしてくれた。学費や生活費の心配から解放されて朴仁徳は勉強に精を出し、15歳で中等部を卒業し、さらに大学部第3期生として引き続き勉学に励んだ。3期生は3人いたが、卒業したのは仁徳のみである。朴仁徳はこのように当時の朝鮮社会では教育を受けるのが難しい境遇にありながら、開明的で決断力のある母の力と自身の大変な努力によって、また、朝鮮女性の近代教育の一方を担ったキリスト教系女学校の存在によって、朝鮮内では最も高い教育を受けることができた。さらに卒業後は、母校梨花学堂に残り中等部と大学部の教師として数学・体育・合唱を教えた。

## 第2節 キリスト教の受容

朴仁徳の場合、キリスト教との出会いと受容はその母を通してであった<sup>15</sup>。前述したように、朴仁徳の母は夫と三番目の息子がコレラで死亡した後、夫の門中から養子を取るように強制された。甲午改革で法的には寡婦の再婚が認められるようになったとは言え、実際に再婚することは難しく、当時の家父長的家族制度が強く残っていた朝鮮社会では、幼い娘を抱えた寡婦が夫の門中の勧めを拒否することは、その庇護が受けられなくなることであり、生存問題と直結した。しかし、母子の将来がかかった養子の問題で悩む母は、いとこからキリストの存在を教えられ、白い喪服をまとったまま雪の中を娘の手を引いて教会に行った。母の信仰はここに始まる。娘の仁徳はクリスマスのプレゼントに黄色い鉛筆と練習帳をもらった。その贈り物が彼女の近代との最初の出会いであった。それを使って、母は仁徳に洞里的のハングルを知っている人からハングルを学ばせた。2週間でハングルを覚えたことが、仁徳の将来の道を開いた。彼女のキリスト教との出会いはただ宗教との出会いにとどまるものではなく、新女性朴仁徳の誕生につながることであった。

母子は毎週教会に通うようになるが、それがうわさになると、朴氏の門中からは若い寡婦が知らない人々の集まっているところに通うことはとんでもないことで、すぐやめなければ門中から追放するという決定をくださった。母は結局信仰と自分たちの将来を選んで婚家を出るという道を取った。

母のこの時の決意が娘仁徳の生涯を貫く信仰生活を決定づけたと言える。母とともに教会に

<sup>15</sup> 母を通してのキリスト教の受容は、梨花学堂の同窓で朴仁徳より2年下の金活蘭も同じである。朝鮮社会の家父長的束縛から抜け出ようとする時、重要な拠り所になったのが、教育とキリスト教であったが、キリスト教は朴仁徳の母のように教育がなくても受容できた。また、朴仁徳の生涯を考える時、母のいきざまが陰に陽に大きな影響を与えていると思われる。自我形成過程やその後の離婚問題などの重要な局面における決断がそれである。

通って信仰するようになった朴仁徳は、9歳の時鎮南浦で洗礼を受けた<sup>16</sup>。信仰だけでなく彼女の受けた教育そのものが監理教と密接な関係を持っている。三崇女学校から梨花学堂中部と大学部、その後アメリカのウエスリアン大学 (Wesleyan College) への留学と、当時の女性としては最高の教育を受けた仁徳であるが、奨学金で学費と寄宿舎費をまかなった仁徳の教育過程は監理教会および信者の支援がなければ実現しなかった。

大学生の時、デトロイトで開かれた北米学生宣教大会で「私の宗教観」という題目の演説をして、好評を得たことがきっかけとなりその後世界一周旅行を二回行い、35カ国で2000回の演説をすることにつながった<sup>17</sup>。大学を卒業した後、仁徳は学生宣教会巡回幹事となって志願奉仕活動としてアメリカ各地さらに英国等ヨーロッパを回って巡回講演を続ける。講演の内容は自身の宗教観が中心であった。1935年の世界学生青年会招待と解放後の文化使節としての講演旅行もすべて宗教人としての活動と言える。植民地期の2回の世界一周講演旅行のなかで、彼女は各国の農村事情と農村女性の生活を見聞し、その後の自身の活動方向を決定することになる。それだけでなく、珍しい世界旅行の体験は、新聞や雑誌の紀行文と世界事情紹介につながり、植民地末期1940年代には、その体験をもとにした節約や生活改善、国民皆労のプロパガンダとして総督府に利用されることにもなった。

仁徳が朝鮮で行った農村女性のための啓蒙活動や1962年の職業専門学校設立もキリスト教を土台にしており、彼女にとってはキリスト教との出会いと受容が、すなわち新しい文化との出会いであり、生涯を方向付ける指針の発見でもあった。

### 第3節 新女性としての朴仁徳

#### 1. 人口に膾炙した新女性朴仁徳のイメージ

15歳の春、奨学金で梨花学堂中学部を卒業し、大学部に進んだ朴仁徳は、勉学に励むかわら、朝鮮で初めて、金エシク・李ファシク・申マシラと一緒に4人の合唱隊を組織し、学校の礼拝堂で歌った。この合唱隊は大変な歓迎を受け、彼女たちの名前は人口に膾炙することになった。街にでも男子たちからひやかしを受けたという<sup>18</sup>。ここから新女性としての朴仁徳のイメージが作られたようである。このイメージは後に離婚問題を扱う新聞や雑誌で、朴仁徳を形容する言葉になった。

<sup>16</sup> 「三・一独立示威関連者尋問調書」朴仁徳第2回、『韓民族独立運動史資料集』14 (三一運動4)、国史編纂委員会、1991年。

<sup>17</sup> 前掲「私の自叙伝」39頁。デトロイトの最初の演説で、朴仁徳は、19世紀末に行われたすべての発見の中で、キリスト教による朝鮮の女性性の発見が最も素晴らしいこと、母がキリスト教を通して新しい生を始める特権を得ることができ、その娘の自分も祝福を受けたと語った。そして、書堂での体験や監獄に5ヶ月半収監された時、神の存在がいかに大きな力になったかを証言して、大変な歓呼を受けたという。前掲「九月の猿」137頁参照。

<sup>18</sup> 前掲「写真自伝」210～211頁。

1930年代初頭に3・1運動期の著名な新女性を取り上げた「新女性総観 百花繚乱の己未女人群」では、思想関係（社会主義系）の女性は除外して、才徳と美貌で世の中に知れ渡った新女性を探して掲載した<sup>19</sup>。この記事で朴仁徳は「一色であり、英語・音楽の天才であった朴仁徳氏」と筆頭に紹介され、「数百年に一回でも現れるかというほどの絶世の美貌を持った上に英語を青山流水のように扱い、ピアノを上手に弾き、（中略）演説がうまく、（中略）何ヶ月か苦しい鉄窓生活までした。要するに、彼女は美貌と一世を風靡した『才』とまた『義』まで備えた才色兼備で鉄血的女性であった」と最高級の賛辞を寄せている。

また、同記事の中では、

その時、ソウルの街々で流行する歌があったが、「歌がうまい朴仁徳」「人物がよくできた朴仁徳」「演説が上手な朴仁徳」、こうして朴嬢の美しい名前が子供から大人の口までいつものぼった。さらにその時、新女性を憧憬する多くの都の才子の胸中には、大理石に彫った浮き彫りのように朝露を飲んだようなこの一輪の百合の花朴嬢の姿態とその声と才操が刻まれた<sup>20</sup>。

と手放しのほめかたをしている。この記事中には、朴仁徳の出生地を平壤としたり、梨花女子大学の第一回卒業生（実際は第三回）としたり誤りが多くすべてを信じるに値しないが、少なくとも、朴仁徳が社会的にも名前が知られた新女性であったことは十分見て取れる。名前が知られていた理由は、先述の礼拝堂での合唱で多くの人の目に触れたからと思われる。それと3・1運動における逮捕・獄中生活が、教育を受けた女性は民族のために率先して先頭にたつという、新女性に社会が要求する条件を満たしていたからであろう。

## 2. 新女性としての自覚

梨花学堂の教師として、3・1運動に参加し出獄した後、結婚するまでの短い期間に朴仁徳の評論が、創刊されたばかりの『東亜日報』に掲載された。「現代朝鮮と男女平等問題」である<sup>21</sup>。ここには彼女の男女観だけでなく、新女性としての自覚に基づいた啓蒙的訴えがある。

朝鮮女子の過去を回顧してみる時、実に冤痛という思いになります。（中略）幾千年も我々女子は人の本業を忘れて男子の拘束下で一挙一動彼らの意志のまま行い、隷属生活を強いられてきました。一步でも閨中を抜け出て暫時も活発な運動をできず、粉骨碎身して

<sup>19</sup> 『三千里』16号、1931年6月号、22～24頁。ここで扱った新女性は、朴仁徳・金瑪利亞・許英淑・金明淳・金元周・李徳耀・黄貴卿・尹心恵等々である。なお、この前篇として、「光武隆熙時代の新女性総観」があり、黄エリ、金美理士、金瑪利亞、朴愛施徳を紹介している。

<sup>20</sup> 前掲「新女性総観 百花繚乱の己未女人群」24頁。

<sup>21</sup> 『東亜日報』1920年4月2日付。

彼らに服役するのみでした。何とか追い出されなければ女子にはひとつの幸福と考え、獄中生活のように、世界がどんななのかも知らず、寂寞とした歳月を送ってきました。しかし我々がこのような待遇を受けたのは、すべて我々が無教育で理想がなかったからです。(中略)

文明の新しい曙光が半島を照らし、我々朝鮮女子も初めて教育の味を味わうようになりました。しかしまだ女子教育は日が浅く一千万女子に全部及びません。所謂先覚者たる新女子はどんな事業を徹底的にしたのでしょうか。ひとつもみるべきものはなく、また虚栄の悪魔が脳裏に充ち満ちて、現代の我々の立場とか、将来の我々の義務を自覚することはさておいて、身分不相応の奢侈を重んじ、やっとある学校の卒業証書でも手に入れると、人の後妻や妾になるので、批判が雨あられとふりそそぎ、女子教育の将来に大きな妨害を与えるのです。(中略)

我々の社会も欧米社会のように、立派な社会にしようとするれば、男女が必ず平等主義をもって相互扶助して猛烈に前進しなければなりません。半島女子よ、急がなければなりません。道は遠いのです。遠大な理想をもって前進しましょう。我々の本当の自分を探す機会がやってきます。(アンダーラインは筆者)

朝鮮女性たちが過去に置かれた地位を「冤痛」と表現し、その原因は女性に教育がなく、理想がなかったからであると論じる。そして、教育を受けられるようになった新女性の言動に厳しい視線を向ける。すなわち、現在、女性にもほんの少し教育の機会が与えられるようになったのに、その機会を恵受した所謂「新女子」は自分の義務を自覚しないで、奢侈に明け暮れている。そして卒業すれば後妻や妾になるなど、女子教育の将来に妨害になることしかしていないと、新女性が担うべき朝鮮女性のための義務を忘れて奢侈と安逸に走っていることを痛烈に批判する。このような新女性を自ら批判する論調は、女子留学生の手になる雑誌『女子界』の主張に通じるものである。

ちなみに、1921年1月に出た『女子界』第6号に掲載されている朴淳愛「門を出られた姉妹達に」では、以下のように論じていた。

世人の新教育を受けた朝鮮女子に対する評論をあげれば、(中略)最近女子たちは学校の門に足を踏みいれれば虚栄の悪魔がその脳の中の第一位を占めるので、現代の我々の立場や将来の我々の義務のようなことは考える余地もなく、分不相応な奢侈を尊び、我々にはふさわしくない文明人の華麗な家庭の安逸な生活を送ろうという空想のみして、女子の職務実行を冷笑し(中略)。(アンダーラインは筆者)

おそらく、当時の新女性批判の中に、「虚栄の悪魔」云々という言い方があったのであろう。

朴仁徳は現在の朝鮮社会は、まだ男女平等からほど遠いと男性の実態を挙げて述べ、欧米のように発展した社会にならなければ、男女平等もやっこないから、女性たちはそのために奮闘しなければならぬと、この啓蒙的な文章を結んでいる。

前掲の文章より6年後の1926年新年の抱負には、新女性朴仁徳の主張が最も強く表れているので、引用してみよう<sup>22</sup>。

私は何よりもまず新年に望むことは、我が国の女子たちがそれぞれ自己という個性を自覚し尊重するようになることです。そして我が国の女子たちが自己という個性を確立し、個性を発揮し、外に出るのにまず人に頼らず生活していただくの力を養うことです。嫁に行こうが行くまいが、自分の手で自分の生活を十分にやっっていく意志がなくては本当の自己の個性をありのまま育てることができないでしょう。

この時、朴仁徳は二人の娘を育てながら、教師として働き、家計を支えていた。「自己という個性の自覚」と「個性の発揮」、その実現のために女性も経済的な力を養うことを強く主張している。自己にめざめ、自己実現をしようとする「個」の主張が初期新女性の特徴であるが、朴仁徳もまさに「個」を主張しただけでなく、たとえば離婚などその後の生き方において実際に貫いていった。「個」の実現を支えるための経済力養成という考えは、「職業女性協会」の活動や解放後における実業学校の創設として実現させた。初期新女性たちの活動期間は比較的短いなかで、朴仁徳は自分の主張を実現するための息の長い活動を続けていったのが特徴である。

## 第2章 朴仁徳の民族運動

### 第1節 3・1運動

1919年3月1日に3・1運動が起こった時、朴仁徳は母校に残って梨花女高と大学部で数学・体育・音楽を教えていた。自伝『九月の猿』には、「私もまた独立運動に参加し旗を振り人々の叫びに合流して靈魂まで震えを感じていた」<sup>23</sup>と叙述している。3月10日、幾何学の授業中、ブレイ校長に呼ばれていくと、警官が2名校長室で待っていて逮捕された。ブレイ校長は警察の正門までついてきたが、追い返された。警察署の監房に入れられる時、若い女性が拷問を受けて血を流しながら尋問室から連れ出されてくるのを目撃した。朴仁徳も尋問室に連行され、示威に参加したすべての学生に対し責任を負って罰を受けなければならないという尋問官に対

<sup>22</sup> 「新年を迎えて 私の希望と抱負（三）新朝鮮の母の言葉 培花学校朴仁徳氏談 夢から覚めよう 個性の自覚を」、『東亜日報』1926年1月3日付。

<sup>23</sup> 前掲『九月の猿』63頁。

し、彼女は「自分は彼女たちの先生ではあるが、正しいことに彼女たちが参加することを妨げることはできないので彼女たちの行動に対し私が責任を負わねばならないとは考えません」<sup>24</sup>と答えたと言う。結局、朴仁徳は拷問を受けないで監房に入れられた。その後、警察署から西大門刑務所に移送され、2221番という罪人番号を与えられ6号室に入れられたが、彼女の部屋の隣に金瑪利亜が入れられていて、二人は壁をたたく方法で連絡を取り合った。それも看守に発見されて独房処罰を受けた後、連絡ができないよう間に一部屋空き部屋を置かれた。『九月の猿』には、刑務所の中の状況や看守とのやりとり、収監されている3・1運動女性参加者のことが詳しく書かれていて、それだけでも当時の当事者の記録として重要である。柳寛順と裁判所で出会ったことや、監房で叫ぶ声や監房の同僚を率いて示威をしようとしたため暴行を受けて死んだことも書かれている<sup>25</sup>。

獄中の朴仁徳に梨花学堂の宣教師たちは、バイブルと食べ物を差し入れてくれ、彼女はバイブルをすべて読み通し、信仰をさらに深めた。

京城地方法院での取り調べは、3月14日と18日に行われ、保安法違反事件として、検事山澤佐一郎が取り調べた。3月2日と4日の集会在朴仁徳の部屋で行われたのかどうか、男子学生の組織と連帯して同盟休校を決めたのかどうか、独立団体を組織し幹事を決めたのかどうか、検事の尋問の中心であった。それに対し、朴仁徳は「尋問調書」によると次のように答えた<sup>26</sup>。3月2日に貞洞礼拝堂で知り合いの羅蕙錫に会い、彼女と一緒にいた金瑪利亜を紹介された。その日に梨花学堂の朴仁徳の部屋には、金瑪利亜・黄愛施徳・羅蕙錫・金ハルノン・孫正順・安淑子・申チェルニョ・朴勝一他一名が集まり、金瑪利亜が昨日朝鮮の独立が宣言されたので女性側も何かしなければだめだと言い、黄愛施徳がそれに賛成した。誰かが、女子団体を組織し、女子団体は各自男子団体と連絡することという提案をし、それについて議論した。団体を維持するために会長や会計を置く必要があるという提案もあり皆も同感したが、2日にはその議案は決定せず、4日に再び集まることにした。

2日の梨花学堂出席者の中で、4日の集まりは、女教師全員が集まらなくてもよく、時間がある者だけ参席するように決めていたので、朴仁徳は体調の問題と父兄が面会に来ていたことで、出席しないつもりであった。しかし、薬をもらうため病室に行ったところ、そこに金瑪利亜・金ハルノン・申チェルニョ・朴勝一とその他2日に集まった人数くらいがいて、議論の最中であった。男子は同盟休校をして明日は万歳を叫ぶことになっているが、その時に女子たちが勉強をしているのはどんなものかという議論だった。仁徳は何も言わず聞いていたが、今は各自が自由に事にあたる時であるにもかかわらず、皆が休校するなどは妥当でも穏当でもない

<sup>24</sup> 前掲『九月の猿』64頁。

<sup>25</sup> 柳寛順の獄中での行動に関する朴仁徳の証言は、柳寛順が世に知られるのに重要な役割をした。チョンサンウ「3・1運動の表象『柳寛順』の発掘」、『歴史と現実』通巻74号、韓国歴史研究会、2009年12月。

<sup>26</sup> 前掲「三・一独立示威関連者尋問調書」、『韓民族独立運動史資料集』14（三一運動4）。

ので、万歳を叫ぶのは各自の自由にするという結論となった。

団体を組織し、その幹事として金瑪利亞・黄愛施徳・羅蕙錫・朴仁徳の4人が決まったが、団体活動に関する議論は後日にまわした。幹事が資金を募集する話は出たが、翌日の万歳示威の件であわただしく、詳しいことは後日に延ばした。

検事の尋問は金瑪利亞や羅蕙錫の尋問の答えを引用するという形をとって、尋問を続けているが、朴仁徳は、提案した者の名前を記憶していないと巧妙に隠しながら、会議の決定事項のみを答えている。同盟休校は決定しなかったこと、独立のための団体を組織することを決め、幹事も決めたがそれ以上は何も決めなかったこと、資金集めも結論は出さず後日にまわしたことなどである。また、自分自身に対する嫌疑、すなわち会議の部屋を2回とも提供したかという尋問には、最初だけ提供したと重ねて答えており、朴仁徳が万歳示威に学生をオルグして参加させたことに関しては、はっきりと否定した。

朴仁徳は7月24日の法廷で30円の保釈金で仮釈放することを告げられ、その日に西大門刑務所から出された。保釈金は宣教師のビルリンジュ博士が出してくれて、刑務所で待っていてくれた。この時仮釈放されたのは、仁徳と金瑪利亞・黄愛施徳・申俊勳、そして青い罪人服を着た年配の女性であった。仁徳は釈放されたその足で梨花学堂に行ったが、故郷の母に会いたくても仮釈放のためできなかった。

朴仁徳が免訴釈放されたのは、他の42名とともに、8月5日であった。この時の釈放者の中には、仁徳以外に金瑪利亞・金ジュニ・羅蕙錫・黄愛施徳ら4人の女性が混じっている<sup>27</sup>。

## 第2節 その後の民族運動

ところで、朴仁徳は大韓民国愛国婦人会事件に関与して、3・1運動での逮捕と同じ年の12月に約1ヶ月間再び監獄生活を余儀なくされた。愛国婦人会とは最初、明神女学校教師呉玄観と群山メリブルデン女学校教師呉玄洲（呉玄観妹）、および京城セブランス病院看護婦李貞淑が万歳事件で死亡した者や入監された者とその家族の救済のために、4月上旬血誠団愛国婦人会として組織された。その頃ちょうどキリスト教徒が中心になった秘密結社大韓独立青年外交団総務李秉澈らが女子高普卒業生中のキリスト教徒を糾合して大韓愛国婦人会を組織しようとしていたので、このふたつの組織が合同して大韓民国愛国婦人会が組織された。呉玄洲を会長兼財務主任に、呉玄観を総裁兼財務部長にし、各会員は毎月義援金を拠出し、集金額の3分の1は中央本部に独立資金として送付し、同志が拠出した義援金は上海臨時政府に送金するなどの活動をしていた。

ところで8月上旬に予審で免訴された金瑪利亞や黄愛施徳が入会してくると、それまでの緩慢だった活動を改めて役員も改選しようとした。9月19日金瑪利亞・黄愛施徳・李惠卿・呉玄

<sup>27</sup> 「43名免訴釈放」、『毎日申報』1919年8月6日付。

洲他11名が貞信女学校内のアメリカ人宣教師アイン家に集まり、会長に金瑪利亞・副会長に李惠卿、総務兼編集員に黄愛施徳、副書記に朴仁徳等を選出し、本部規則や支部規則等が制定された。朴仁徳は梨花学堂内会員24名の代表となった<sup>28</sup>。

9月、呉玄洲は夫姜楽遠と謀議した後、劉根洙とともに警務局長赤池濃をたずね、自分が関係した大韓愛国婦人会の一切を告発したため、金瑪利亞事件が引き起こされ、金瑪利亞・張善禧・李惠卿他7・8名が懲役に付された。この事件で朴仁徳も関係者として逮捕されたが、今回は中心人物ではなかったので、収監期間も短かった。

なお、朴仁徳は、アメリカに留学中、同時期に留学していた金瑪利亞や黄愛施徳とともに、祖国の独立のための運動にも参加した。たとえば、在米女性たちを糾合して、臨時政府を後援する組織である槿花会結成に参加したり、独立のための言論の武器である「三一申報」発刊の発起人に名を連ねている。

槿花会は、1928年1月1日、ニューヨーク地方にいる韓国人婦人たちが国家と民族のために組織した団体である。2月12日にニューヨーク韓人教会で発会式を持った。この会の目的は、(1) 民族的精神を鼓吹し大同団結を図る、(2) 教育と事業を奨励する、(3) 本国の事情を広く外国人に紹介する、等であり、実業部と教育部と社交部を置いた。会長には金瑪利亞、総務に黄愛施徳が就任し、朴仁徳は社交部の役員になっている<sup>29</sup>。

また、『三一申報』は、ニューヨークにいる韓人とアメリカ各地の有志が連絡しあって、刊行を計画した新聞である。創刊趣旨書には、(1) 大韓民国の独立を完成するため韓民族の自覚を促し民論を喚起して大同団結を進める、(2) 日本の一切の不義と残忍凶暴を摘発し、因習的伝統的社會組織の一切の欠陥を暴露し革命勢力の発揚を期す、(3) 海外・国内の民族社会に発生する事実を厳正公平敏速に報道する、(4) 各方面の世界の消息を広く総合して生活増進に役立てる等が書かれている。この発起人中に朴仁徳・金瑪利亞・黄愛施徳3人の名前が記載されている<sup>30</sup>。

アメリカでの勉学と仕事の忙しい生活の中で、どれだけの実態を持った活動ができたかは不明であるが、3・1運動からの一貫した民族意識をうかがうことができる。

<sup>28</sup> 「驚くべき秘密結社 男女の独立陰謀団 大韓独立青年外交団と大韓独立愛国妾(婦)人会」、『毎日申報』1919年12月19日付。

<sup>29</sup> 「異域に無窮花の枝—春光に輝く ニューヨーク婦人たちが槿花会組織」、『新韓民報』1928年4月5日付。ただ、ここでは金仁徳となっているが、金瑪利亞や黄愛施徳との密接な関係を考えると、朴仁徳の間違いであろう。

<sup>30</sup> 「『三一申報』創刊趣旨書」、『移入輸入不穩刊行物概況』、国史編纂委員会韓国史データベース。

### 第3章 朴仁徳の結婚・離婚と社会的反応

#### 第1節 結婚と社会的反応

朴仁徳は、仮釈放期間が終わって2週間後、大変可愛がっていた教え子の金英淑を通じて、彼女の4番目の兄である金雲鎬から夕食の招待を受けた。ともに釈放された申俊励と一緒にあった。英淑の母と姉と妹が非常に暖かくもてなしてくれて、心が楽になっただけでなく、その兄である金雲鎬は美男で背が高く、鋭利で礼儀正しく気持ちがよかった。朴仁徳はそれまで宣教師の先生が自分の人生のモデルであったため、結婚を考えたことはなかったが、「若い男性に心が揺さぶられたのは私の22歳の人生で初めてであった」と書いている<sup>31</sup>。その翌日から英淑が間に入って手紙のやりとりが始まった。

その後、愛国婦人会事件での二度目の入獄があり、さらに二人の友情はさらに進展し、彼は自分が既婚であるという事実を告白した。12歳の時、1歳年上の女性と結婚したが、実際に妻が彼の家に入った後性格があわないことがわかった。しかし、家門の伝統と家父長的家制度に従って結婚生活を続け、父が亡くなった後、離婚をしたということであった。結婚は法的には問題ないが、教会では離婚した男性と結婚することに反対しており、そのような結婚をすれば追放されることになる。

朴仁徳が結婚するかどうか悩んだもうひとつの理由は、校長のエリス・アペンツラー先生が、仁徳をアメリカのウエスリアン大学に留学させるための奨学金と旅費300ドルを準備してくれたことであった。悩んだ末に仁徳は先生の説得を振り切って金雲鎬と結婚する決心を固めた。友人も反対し、すべてを犠牲にして彼女を教育させてきた母すら反対であった。

1920年7月7日、親しい友人数名のみ参席した静かな結婚式が新郎の家で行われたが、母も親しい友人も出ず、葬式のような感じがしたと朴仁徳は書いている。結婚生活は2週間くらいは幸福であったが、母と友人の忠告は的中した。彼には結婚前までソウルで一番美しい妓生の妾がいたことがわかったが、問い詰めたところ彼は否定したので背信感を持った。その上最初の妻と妾を整理するため、父から譲り受けた財産をみな使ってしまった。さらに、彼には金を儲ける能力がないばかりか何の訓練も受けていなかった。

結婚後いくばくもなく朝鮮の伝統的な家父長制の実態を思い知ったのみか、破産した上働かない夫のため、住居も転々とし、生活困難に陥った。生活のため、長女を義母に預けて朴仁徳が働くことにした。母校に戻る希望はもっていたのに、既婚のため正式の就職ができず、聖教学校や家庭教師のアルバイトをした。その後培花女学校に就職できたが、夜も音楽を教えて働いた。「写真自伝 波乱多き私の半生」では、次のように結婚生活を回想している<sup>32</sup>。

<sup>31</sup> 前掲『九月の猿』82頁。

<sup>32</sup> 前掲『写真自伝』211頁。

私の結婚生活は今ここで話してもいやになります。6年暮らしてその間に自分自身すら忘れようと心をしっかり保つしかありませんでした。心と体がともにゆとりがありませんでした。梅花学校時間教授、侍天教堂個人教授、いずれにしても一日に14時間の労働で、体は疲労の極に達し、心もまたそれ以上に疲労し憂鬱で苦しかったです。地獄で暮らすようなものでした。愉快的時間はありませんでした。6年を暮らす間に子供が二人生まれました。二人の子供を育てながら、その日その日を水に沈んだかめに水を注ぐように生きてきました。

このような結婚生活であったが、その事実を知っている人は少なく、社会的には新女性の奢侈を求める傾向が生んだ結婚と見られていた。結婚当時から流布していた二人の結婚のイメージが次の記事によく現れている。

朴仁徳嬢の愛を得るため自己の全存在を犠牲にした中で幸福のくじを引いた人は、一介の書生であったが、彼は当時梨花学堂の姉妹校である培材学堂を終えた青年富豪でまた美男子の金雲鎬氏であり、当時の朴仁徳嬢にも金雲鎬という青年はまたとない大きな存在であったのである。金雲鎬氏が彼女を完全に手に入れるまでには、彼女の歡心を買うため、精神的にはもちろん、莫大な物質を犠牲にした。府内東大門外に別荘を買い、数千円のピアノを買ってあげ、彼女と会うことが大事業であるかのように全力を傾け、やっと彼女の心を獲得した。その結果最後の魂胆は順調に進行し、今から11年前である大正9年6月のある日、貞洞第一礼拝堂で盛大な華燭の典を挙げ、金雲鎬氏が凱歌を挙げた。だから朴仁徳嬢を取り巻いていた若者の失望と落胆は並大抵ではなかった<sup>33</sup>。

朴仁徳は、活路を開くために、宣教師の助けを得て、夫も説得して、1926年8月アメリカに留学した。二人の娘は義母が世話をしてくれることになった。彼女が仕事をして家庭の経済を支えることができたのも義母のおかげであったが、今回も義母の支えは大きかった。

アメリカでは、宣教師のついで奨学金を得ることができたウエスリアン大学で2年に編入して神学の勉強をした。その一方で、家政婦をしたり、メイシスデパートの韓国人が経営するカウンターで1週間に5回アーモンドケーキを売る仕事をしたりした。故国にいる家族のためにも彼女は仕事を続ける苦学生であった。

## 第2節 離婚と社会的反応

朴仁徳は、1928年6月、2年で学位を取り、さらにコロンビア大学師範大学修士課程に入った。

<sup>33</sup> 「朴仁徳女史 世の全ての耳目を集中させた近來稀に見る扇情的事実」,【毎日申報】、1931年10月11日付。

第1章第2節で述べたように、学生時代に米学生宣教会で演説をしたことがきっかけとなり、留学生生活を終えた後、学生宣教会巡回幹事になって、アメリカ・カナダ・欧州・アジア等で宗教講演をしてまわった。

1931年10月、6年ぶりで朝鮮に帰国したが、彼女が帰国したことはすぐ新聞に報道され、次に引用するように大変な歓迎の雰囲気であった<sup>34</sup>。またキリスト教会と各方面の人々が集まって歓迎会も催された<sup>35</sup>。

3年間欧米各国への巡回講演で朝鮮を世界に紹介し、喝采を浴びてきた朴仁徳女史は渡米以来6年ぶりに、6日午前11時40分汝矣島飛行場に到着、旅客機で帰国した。女史は今年6月ロンドンを出て、フランス・ベルギー・ドイツを経て、デンマークからスウェーデン・ベルリン・ワルシャワ・オーストリー・スペイン・イタリア・シチリア・アレクサンドリア・トルコ、さらに黒海・エーゲ海を渡り、シリア・ユダヤを見て紅海を渡り、インドへ、そこからシンガポール・香港を経て上海に至った。9月14日に上海から南京・北京を経て天津から船に乗り、大連に行き、大連から奉天・安東を経て、10月2日に平壤に降りた。同6日に飛行機で入京した。彼女は、大正15年8月2日に朝鮮を立ち、米国に渡り、昭和3年夏ジョージア州ウエスリアン大学を卒業した。卒業してから万国キリスト教青年会の招請で昨年まで米国とカナダで巡回講演をし、今年春にまたイギリスでやはり3ヶ月間各地の重要な大学の招請で巡回講演をし、帰国する途中でも各国の重要団体の招請で講演をしたという。彼女の熱弁は世界各国で朝鮮の事情と朝鮮民族の独立運動史を吐露し、熱狂的歓迎を受けると同時に朝鮮を十分に紹介したという。

ところで、満州から平壤に行ったのは、この間ずっと問題になっていた夫との関係を母と相談するためであった。母は朴仁徳がアメリカから子供のために送ってきたお金で金雲鎬が妾を置いていることを理由に決断を促した。離婚すれば、教会も友達も遠ざかるだろうし、当時の法律では子供養育権は父に与えられるので、子供も喪失するだろうという躊躇の気持ちはあった。しかし、仁徳は一人になる覚悟で、京城到着後も婚家にもどらず、知人を介して別居を要求した。彼女がソウルにもどりながら婚家に帰らないことは、すぐ新聞記事になった。歓迎の記事が出た翌日のことである。

朴仁徳女史が戻ってきた。大正15年8月米留学の途に上って以来一般の人の頭から其の記憶すら消えようとしていた6日、突然京城にもどった。朝鮮を離れて以後、米国ジョー

<sup>34</sup> 「遊学と講演から六年ぶりに米国から故土へ、世界に朝鮮を紹介し朴仁徳女史帰郷」、『東亜日報』、1931年10月9日付。

<sup>35</sup> 「朴仁徳氏歓迎会」、『東亜日報』、1931年10月28日付。

ジア州ウエスリアン大学を卒業、万国キリスト教青年会の依頼で米国各地を巡回講演し、今回もどってきたが、京城には府外阿峴里に夫金雲鎬氏と娘二人惠蘭(11)と惠蓮(9)が、母を恋しがっている。しかし彼女は6年ぶりに朝鮮にもどってきたが、京城内にいながら自宅にいる夫と娘を訪ねるつもりがないだけでなく、数年来手紙の往復すら途絶えて、彼女の婚家では来ることすら知らなかったという。そして彼女が京城に来た後も住所すら知らされず、二人の娘は母がきたという噂を聞きながら、母を訪ねたり会ったりする道すらなく、父である雲鎬氏は朝晩娘を慰めて焦燥しているというが、京城に戻ってきても家を訪ねないことに一般の関心が集まっている<sup>36</sup>。

ソウルの婚家に戻らないと言うことのみをもって、離婚が成立する前から大きな社会問題になり、離婚直後はもちろんその後も新聞や雑誌に「朝鮮のノラ」としてセンセーショナルな記事で扱われた<sup>37</sup>。女性側からの離婚請求が朝鮮社会では珍しいことだけでなく、二人の子供がいること、朴仁徳がかつて新女性として非常に著名であり、その結婚も人々の耳目を引くのに十分な内容だったという条件が重なっていたからである。

【毎日申報】では彼女が帰国した直後の1931年10月11日から15日まで連日「帰って来ても帰らない不思議」という特集記事が掲載された。第1回「[朴仁徳女史、世の全ての耳目を集中させた近來稀に見る扇情的な事実]」では、「6年ぶりに故国にもどったその母はすでに1週間になるのに自分が帰るべき夫の家にはもどらず、あだこうだという言葉一つなく市内に姿を隠してしまった。典型的現代女性で理想的な妻の標本という彼女が6年間もなじめない外国に行ってもどった今日、極めて近い距離の家を訪ねないことはどんな理由からなのか。彼女は夫がいることを忘れたのか。愛する2人の娘が母を恋しがって泣いているのさえかわいそうだと考えないのか。家に戻らない妻—子供を訪ねない母—彼女は夫に対する愛がなくなったのか。娘に対する母性愛までもないということか。不可解な一種のなぞのようなこの事実は多くの人々に好奇の衝動を与え、一般社会に少なからぬ波紋を投げかけ、これをめぐるうわさはすでに静まったうわさまで呼び起こすと同時にまたもどってきた彼女を中心に一般の視線を太陽のように集めている。果たして、彼女はすべての過去を忘れようとしているのか。我々は今、彼女の過去を回想し、歩んできた道をふり返ってみるのも興味のないことではないだろう」と特集を組んだ理由を述べる。彼女の行動が好奇心をさそい、一般社会に波紋を投げかけているので彼女の過去をたどることになると新聞としてはきわめて好事家的態度である。そして二人の

<sup>36</sup> 「飄然歸国した朴仁徳、家に帰らず身を隠す、来たことは知って会えない家族たち夜を徹し焦燥」、【毎日申報】、1931年10月10日付。

<sup>37</sup> 雑誌記事として次のものがある。「帰国不帰家の先端女性」、【別乾坤】6-10、1931年11月：夢通「家庭から社会に—朝鮮が生んだ現代的ノラ朴仁徳女子」、【新東亜】1931年12月号：「婦人問題に対する批判、朴仁徳女子に対する田有徳氏の見解」、【三千里】1932年2月号：「戻ってこない母朴仁徳」、【第一線】2-6、1932年7月：「朝鮮のノラとして人形の家を出た朴仁徳氏」、【三千里】1933年1月号。

結婚の事情を美女と富豪青年の結びつきというイメージで描きだす。

第2回「耐え難い傷を受け、追い出された金氏の本妻、一人の女性の成功は一人の女性の骨髓に達する恨み、興尽悲来物質的受難到来」では、10年間同居した何の罪もない前妻を実家に追い出したが、夫を奪われた李氏は人の家の女中をしているという消息を伝え、その後の朴仁徳の結婚生活は物質的土台がくずれ、職業婦人として生活せざるをえず、アメリカに渡ることになったと述べている。

第3回「母を恋しがる幼い娘と記者の問答、笑顔の中に悲しみ、言葉の端に宿る思母の至情」という題で、娘たちの顔写真とともに、娘にインタビューした内容を載せ、社会の同情を引く書き方になっている。

第4回「この問題の中心に曰可曰否、区々たる見解、正しいという人々間違っているという人々、教会内でも議論が紛糾」と教会関係者の意見も賛否両論だとしている。反対する意見は、彼女がアメリカ式教化を受けた新女性の代表だとしても東洋の家庭制度と倫理から見て許し難い、いくら夫がいやでも乳飲み子を捨てて外国に行って6年ぶりに帰って来て母を待つ子供たちを一度も尋ねないのは非人情、愛の旗の下にキリストの名前で他人を指導すると言う人がしてはならない行動であるなどであった。賛成意見は個性を求め拘束と忍従的生活のくびきから抜け出ようという理想と抱負を發揮しなければならないという、彼女に好意的なものである。

最後の第5回「理由相反する各主張、残ったのは問題の帰結、多くの女性のために反旗を翻した朝鮮の『ノラ』朴仁徳女史」では、このような状況に至った理由を夫婦それぞれにたずねた。これを見ても夫金雲鏞と妻朴仁徳の認識は相当に隔たっているようである。

まず金雲鏞の答えは次のようである。

彼女の表向きの理由というのは夫たる私が経済的に無能力だということです。しかし私はこれを単純に原因だとはみることができず、また見ていません。彼女が外国に行っている間に私を棄てようという気持ちが起こったのです。私はその動機をよく知っています。(中略)しかし私が知っているそれは今言うことはできません。彼女が私に自分のことを考えないでくれと言ったのは1929年春かと思います。彼女の手紙を受け取って考えたところも多いのですが、子供達が母のいない子供という言葉を開かないために私はいろいろ彼女に勧告していました。しかし彼女は最後まで自分の主張にこだわりました。そしてこのたび朝鮮に戻る直前まで何の消息もなく満州に来てこのような注文をしました。(中略)それで彼女の注文通り(別居のこと)してやると答えました。もし干渉するといったら朝鮮にもどらなかったかもしれません。そして帰ってからは教会を中心に離婚を要求してきます。絶対に離婚しないと答えましたが、あまりにもしつこい行動なので、断念して離婚をしてやることに決心しました。私が離婚をしてやるので金を出せとまで言ったということが世の中に広まっています。私はそのような要求をしたこともなく、またくれると言っ

でも受け取りません。すでに家庭を捨てた女性ですからその言葉のように社会のために多少の貢献をするのであればそれで慰めにします。

おそらく金雲鎬は離婚の真の理由である妾の存在を隠しているため抽象的な理由になっているのであろう。それに対し、朴仁徳の理由は大変具体的である。しかし、当時の家父長的女性像が色濃く残っていた社会に挑戦する強い表現が使われており、その後朴仁徳を排撃する特集が組まれることになる。(下線はその後の記事で問題になった表現)

夫と子供を食べさせるためだけに生活しなければなりませんか。子供を産むことだけしなければなりませんか。それも息子のみ。そして服を着せ食べ物を作って食べさせることだけしなければなりませんか。私は女だからどこまで夫の召使いになれということですか。私は結婚して10年になる今日まで彼等をお世話するために、彼等の母であり妻であるより、召使いの役割をしてきました。だから私は今までも彼に経済的に独立してくれと哀願しました。妻という人間は骨身を惜しまずに彼等を養うために仕事をしているのに夫は家で昼寝ばかりしているということですか。私はこれ以上さらに忍従することはできません。新女性であり、先覚者である私がこれに屈従するとすれば、後の女性達にも召使いになれということをお教えることです。私は彼に離婚を要求しませんでした。ただ別居を要求したのです。(中略) 離婚をしてあげるからお金をだせだそうです。

この特集記事が出た後、10月20日から24日まで5日間にわたって、「家庭評論 自称先覚者朴仁徳を埋葬する」という紫饅洞人の批判が掲載された。第1回目の副題は「彼らの家庭を作った時と今日の立場」で、朴仁徳が結婚を決意した理由を金雲鎬の貴公子的外貌や身なり、経済力が梨花の楊貴妃のように美しい彼女をしてすべてのことを捨て結婚に飛び込ませた理由であると論じ、すべての出発点を彼女の物質的欲望に置こうとしている。

第2回「クリスチャンである彼女は神のさわやかな言葉を忘れたのか」と題して「富裕な生活と美しい容貌のために結婚した人はその二つの条件がなくなる時、離婚するのが当然なのかもしれない。しかしこれは教養のある女性先覚者と自称する女性としてすることか」、「新女性には肉親の愛もないのか」と新女性としての仁徳に厳しい言葉で難詰している。

第3回「権利を主張しようとするれば義務も分担しなければならない」では、朴仁徳の「夫と子供を食べさせなければならないのか」という言葉に対して、「一つの家庭を維持するのに、夫と妻は全く同じ義務を負担しなければならない」という前提のもとで、男女同権を主張する以上、妻の収入のみで生活を維持する場合があっても、それほどおかしいと考えるにはあたらないと批判する。

第4回では、「子女は男子にのみ子女となるのか」という副題で、仁徳の子供を生み育てる

ことが女性の役割と考える夫への反論を批判したものである。

第5回は朴仁徳の「服を着せ食べ物を作って食べさせることだけしなければなりませんか」という表現をやり玉にあげたもので、「夫と子供のためにちょっと『サービス』をしたので、それを女中の役だと考えなければならないのか。子供は自己の生命の延長なので、自分のために苦勞することを普通の女性としては大変だとは思わない」と批判する。そしてさらに、「外国に留学して彼らの長所を学ぶ前に彼らの欠点のみ学んで来てみだりに先覚者だとふるまい、厚顔にも後進云々することはとうてい許し難い（中略）。最後に彼女のためにひとことお願いするのは自由と放縱を混同するなど言うことだ」ときわめて強く彼女の言動を戒めようとしている。

結局、離婚をすることになった朴仁徳に対し、社会の雰囲気はどのようであったのか、雑誌に載せられたアンケートを見てみよう。「家庭から社会へ、朝鮮が産んだ現代のノラ朴仁徳女史」では<sup>38</sup>、次のような質問をキリスト教系人物や教育者・ジャーナリストに問うた。

- 問1. 朴仁徳女史の離婚をどのように見ますか？  
 問2. 離婚のために将来氏の活動に妨害ができないか？  
 問3. 氏が再婚するとすれば？

表1 朴仁徳の離婚に対する各界名士のアンケート

姓名	職業	題目	問1に対する回答	問2に対する回答	問3に対する回答
梁柱三	朝鮮監理教会 総理師	絶對的に言えば不可	姦通罪以外には離婚は不可	既成の宗教団体に入っては活動ができなくなる。	姦淫なので黙認するしかない。
金昌俊	朝鮮主日学校 連合会会長	本来結婚が失敗	結婚以来10余年間代価を払った。同情の余地多い。	当分間先頭に立たないように。	容認できない。
李哲洛	朝鮮長老教教育局 総務	活動舞台が制限される	黙認	教会の中での仕事は困難	再嫁は淫行
柳澄基	新生社	超人になれない恨	事情は離婚するしかない状況		許しがたい
崔鳳則	基督教宗教教育 主幹	人材を惜しむ	私事なので当事者に任せる	仕事をするのが社会のため、娘が可哀想	
金鐘萬	協成女神学校 長	悪い先例になる		基督教の中では頭を上げられない、田舎の篤信者にとって信仰にまで悪影響	
咸尚勲	東亜日報社	当然なこと	離婚は当然		黙認
李青田	東亜日報社	母性愛無視が問題	離婚は当事者の問題		
李殷相	梨花専門学校	一向に知らないこと			

<sup>38</sup>【新東亜】1931年12月号。

総じて、彼女の離婚に積極的に賛成する人はいず、彼女の活動舞台であるはずの宗教界での仕事も今後困難であるという認識である。アンケートに表れているような朴仁徳への厳しい社会的雰囲気の中で、現実には、離婚のため仕事もできなくなり、申興雨夫妻の家に間借りをして子供たちのための日曜学校を始めた。しかしこのことはやがて仁徳と申興雨との関係に対するキリスト教社会の疑惑を招き、嫉視の対象にもなった。その後、日曜講話の仕事も少しづつできるようになり<sup>39</sup>、彼女は職業女性の自立と農村女性への啓蒙運動に邁進していったが、申興雨の協力を得た農村啓蒙運動のために、尹致昊派と申興雨派が対立した1930年代の朝鮮キリスト教の内部分裂に巻き込まれた。たまたまフロリダの宗教団体連合会総会で演説をしてくれたとの招請状が届いたので、スキャンダルを避けるためもあって、1935年末再度アメリカにわたって宣教活動に従事することになった。

## 第4章 朴仁徳の社会活動

### 第1節 女子職業協会

女性も職業をもたねばならないという考えは朴仁徳にあっては、非常に強いものであり、実際にアメリカ留学中もふくめて、常に職業につくか事業をしていた。結婚生活における事情、そして離婚によって経済的自立が必須だったという理由があったが、本来自立した個性を打ち立てるためには経済力が必要という信念が強かった。アメリカ留学中に北米留学生雑誌『ウラキ』に載せた「朝鮮の女子と職業問題」<sup>40</sup>には、「先づ男子の支配から離れて即ちその付属物たりし脚絆を脱して完全な自立的個性を養はむとすれば経済の実験を得ねばならぬ。在来の女子は男子の奴隷であったが現代の女子としては自体の汗を流す労働を賤しく見てはいけない。現代の女子で働くことを厭ふ者は自体の個性を否定すると云ふよりも一層自我の破滅を自ら企待するものである」と主張し、女性が職業を持つために、朝鮮では欧米のような子供の養育院や衣食住の便利は望めないが、「先づ成<sup>アツ</sup>範囲内で可能性のある処までは我々も便利な点を求めねばならない」と前進的な方法で改良していくことを提案している。また女子のための実業機関の必要を強く述べている。

朴仁徳自身も職業婦人として職業婦人協会の創立にかかわった。職業婦人協会は、1926年1月京城府仁寺洞泰和女子館で、職業婦人の親睦を目的に望月倶楽部が結成され、1928年1月に職業婦人協会に発展的解消をした。創立の時は朴仁徳は朝鮮にいたので、設立に直接参加したと思われるが、職業婦人協会に改称される時は留学中であつた。そのため朴仁徳は国際部長と

<sup>39</sup> 「朴仁徳氏講演、礼山」、『東亜日報』1932年11月10日付：「日曜講話 石橋礼拝堂、【贈物】」、『東亜日報』1934年11月25日付等々。その他「欧米漫談会」を望月倶楽部で行ったり（『東亜日報』1932年2月23日付）、権友会の平壤新年大講演会の講師にもなっている（『東亜日報』1932年1月10日付）。

<sup>40</sup> 『ウラキ』3号、1928年4月。この文章はその後日本語に訳して『朝鮮思想通信』1928年5月1日・2日にも載せられた。引用文は『朝鮮思想通信』のものである。

いう役職を担当したのであろう。帰国してから、仕事を通して安らぎを得、周囲の自分に対する批判を聞く暇がないように、新しい仕事に没頭した朴仁徳は、1934年、韓国女性で初めてのスケート大会とファッションショーを企画した<sup>41</sup>。ファッションショーは、女性と子供の衣類を色と機能面で実用的に作り、個性を表現できるようにするという目的があった。YMCAの大講堂を使って、すべて手作りで行き、大変な盛況であったという。朴仁徳は、その後も労働服の提唱や女性と子供服の改良を提唱している。

## 第2節 農村女性啓蒙運動

職業女性協会で新しいプロジェクトを立ち上げた朴仁徳の最も大きな希望は、朝鮮の人口の4分の3を占める農村で農村女性やこどものために働くことであった。農閑期に京城周辺の幾つかの村を回って夜学を行い、常識・衛生・育児の知識など生活改善にすぐ役立つことを教える一方、ハンゲルの講習も行った。同時に農村事業のための組織と指導者の育成を痛感し、センターとしての農村女子事業会を設立した。農村女子事業会は、1931年10月に創立したが、その後事務所を京城鐘路にある朝鮮耶蘇教書会ビル4階の一室に借りた。

農村女子事業会の創立目的は、①活的精神を涵養する、②文化を向上する、③知識を普及する、④産業協同組合を奨励する、⑤家庭副業を指示する等であった<sup>42</sup>。資金源としては、フロリダ宣教教会団体連合会の事務総長ウッドポットを通しアメリカから送られた寄付金を基金にして、会費を一時払いで10円以上または年1円以上を納入する会員を集める方式を採ったが、150名ほどの会員が集まったという<sup>43</sup>。

新聞報道によると、具体的な事業の進め方は移動学校方式と、孔德里に設置した修養所に会員を募集して農村家庭に必要な知識を教える方法があったようである。

農村女子事業協会では昨年度に朝鮮で初めての試みである農村移動学校を設置し、東小門敦岩里と京義線水色駅付近と其の他四五箇所で農村婦女子に家庭改良を目標に衛生・児童教育法・緊急治療法・東西洋烈婦名・組合・畜産等諸学・ハンゲル等を教授して良好な成績を得たが、今年秋冬には農閑期を利用して、来る十二月四日から同十六日までに孔德里に設けた修養所で会員40余名を募集して農村家庭に適切な諸事を教導するつもりだ<sup>44</sup>。

忙しい農村女性が対象なので、農閑期でなければ実施できない事情があり、一カ所での講習を終えると、協力者にまかせて、新しい地域に移動していく移動学校方式が基本で、後に修養

<sup>41</sup> 『九月の猿』194～196頁。

<sup>42</sup> 「農村女子事業会を指導する女流事業家朴仁徳氏訪問記」、『実生活』、1932年6月、奨産社。

<sup>43</sup> 『九月の猿』201頁。

<sup>44</sup> 『東亜日報』1933年11月5日付。

所方式が併用されたとみられる。

朴仁徳の農村女子事業協会を中核とする農村事業は、デンマークやドイツ農村での見聞が基礎となり、申興雨のキリスト教系農村運動の影響もあったと思われる。しかし何よりもその根本に平安道の貧しい農村での直接の体験が土台になっており、農村の貧困と無知を改善する鍵を農村女性の啓蒙に置いている。彼女は朝鮮農村の疲弊の最大の原因が、植民地下の地主小作問題にあると理解していたが<sup>45</sup>、自身の農村再生活動の目標は農村主婦の覚醒と定めた。その具体的な改善策は、次に見られるように非常に実際的なものである<sup>46</sup>。

不平をいだいて消極的に考えるより微弱ながらすでに自分にあるものをもっともう少し便利に趣あるように新しくするのが、これより優秀な方法を探すときまで最も上策ではないかという考えを持って、家庭生活に全責任を引き受けている主婦にこの意図を伝えている。(中略)生活に対する常識を得よう。簡単な諺文を一日も早く学んで普通常識に対する本を読もう。外で草刈りなどをするときでも普通の時の衣服を着てその暑い太陽の下で頭に何もかぶらず仕事をするが、労働服をちょっと簡単に作って着て、女性も頭に何かかぶらなければならない。家をきれいに清掃しよう。家庭予算を立てよう。

朴仁徳の農村主婦を対象とする農村改善運動の特徴は、先覚者がそれぞれ婦女を集めて教える方式で、衛生・育児法の知識獲得・ハンゲルの習得・労働服改善・家の清掃・家庭予算作成という現実的・改良的改善策を提示したことである。

このような朴仁徳の農村生活改善運動は、キリスト教を土台に自身の畢生の仕事として開始されたものであるが、ちょうど同じ時期である1932年から開始された農村振興運動と重なり合う方向をもっていた<sup>47</sup>。

そして、農村女性修養所を設置し、生活知識普及・協同組合奨励・家庭副業を教える等の事業を進めていた時、基督教連合大会朝鮮代表として2度目のアメリカ行きが決まりこの事業は中断されることになった。アメリカ行きの事情は前章に記した通りである。

<sup>45</sup> 朴仁徳は農村での実際の活動をもとに、1935年に「農村教役指針」を刊行した。その第2章は「農村社会問題」であり、先ず最初に現下の朝鮮農村の重大な問題は小作農の増加であると叙述している。また、朴仁徳は農村女性対象の啓蒙運動をする一方、1932年に「丁抹国民高等学校」を刊行し、デンマークの農村運動、国民高等学校運動、協同組合運動に対しての見聞を書いている。

<sup>46</sup> 朴仁徳「農村家庭と生活改善」、【新東亜】、1932年11月号。

<sup>47</sup> 拙稿「1920～30年代における日本と植民地朝鮮の生活改善運動」、中村哲編著「近代東アジア経済の史的構造 東アジア資本主義形成史Ⅲ」第7章、日本評論社、2007年。

## 第5章 朴仁徳の親日運動

### 第1節 徳和女塾の創設

1937年9月、2度目の欧米巡回講演から帰国した朴仁徳の目には、2年の間の朝鮮社会の顕著な変化が見て取れた。日中戦争の勃発と国民精神総動員運動の開始は朝鮮社会の雰囲気重くしていた。とりわけ驚いたのはみな日本語を使っていることだったという<sup>48</sup>。朴仁徳は今まで日本語を習う環境にいなかったため、日本語ができなかったが、社会活動の必要と子供との意思疎通のために日本語を習い始めた。橋北町日本語講習会で緑旗連盟婦人部の須江愛子が先生であった。それをきっかけに緑旗連盟婦人部との関係が開始されることになる。朴仁徳は総動員体制下で内鮮一体を標榜する女性指導者に変身していくことになる。朴仁徳が総督府に自ら接近していった理由について、本人は「虎穴に入らずんば虎児を得ず」と述べているが<sup>49</sup>、米国の自由な社会を経験したはずであり、留学中も民族運動には参加していた朴仁徳がなぜそのような行動を取り始めたのか、特に1941年以降日本がアメリカと対戦するようになった時、宣教師たち生涯の恩人たちの故国との戦争になぜ協力できたのか疑問のあるところである。

1938年になるとこの間見聞してきた各国農村の紹介記事「世界の農村巡礼記」<sup>50</sup>をはじめ、総督府の御用新聞『毎日新報』（1938年4月29日より『毎日申報』を改称）への朴仁徳の寄稿が目につくようになる。そして徐々に総督府の推進する新生活運動・皆労運動のプロパガンダ的存在になっていく。朴仁徳の生活に関する考え方は、虚栄心を捨てて節約し、女性も労働するという合理精神にあふれていて、これは彼女の従来の体験と外国経験に基づくものであり、特に総督府の方針に合わせたわけではなく、そのことが、プロパガンダとして利用される格好の理由にもなったであろう<sup>51</sup>。

朴仁徳は1941年徳和女塾を開塾し、長い間の宿願であった青年女子教育に携わるようになる。それまで農村婦人の啓蒙のため、京畿道各地をまわり、最後はヤンコゲに通っていた。し

<sup>48</sup> 前掲『九月の猿』222頁。

<sup>49</sup> 前掲『九月の猿』223頁。

<sup>50</sup> 『毎日新報』1938年8月3日付。ドイツ・デンマーク・フランス・イタリー・インドの農村についての紀行文である。ドイツ農村の勤儉節約やデンマーク農村婦女の副業など朝鮮農村にとって参考になる点を記している。

<sup>51</sup> 生活改善や節約については、「生活改善座談会」（『毎日新報』1939年1月1日付）で家庭での簡単な節約を論じ、「虚栄心棄てて奢侈品を廃し一ひたすら儉素な新生活—朴仁徳氏談」（『毎日新報』1940年7月22日付）で「今度奢侈品を全部禁止するようになったが、これは国家のためからも我々の生活のためからも新しい生活にはいって行くよい機会です。（中略）つまらない虚栄心から装う人々の特に女性達の悪いくせです。私たちは分に合う生活をしなければなりません。外見や虚栄のための生活より本当に真実な考えで生活のための生活、時局に合う生活をしなければなりません」と奢侈品を捨てて時局にあう生活を訴え、「女子の虚栄心」（『毎日新報』1940年7月25日）では「虚栄は病気である。（中略）享楽生活に陥るときは国が衰亡する。（中略）現代ドイツ女性を見ても第一次世界大戦の時にドイツが死境に陥ったのをドイツ女性全体が鉄のような固い決心で勤儉節約をずっと徹底的にやってきたため今日の勝利は彼らのものになった」

かし、物資不足でバスの便が難しくなり、里長もやめることを勧めたので、2棟の家を売り、ソウルに所有していた空き地に学校を建てた。徳和女塾である。名前は美徳と平和を表すという。

徳和女塾は1941年2月18日に認可され<sup>52</sup>、同年4月に社稷洞で開校したが、設立者朴仁徳は同学院に経営基金として100,000円を提供し財団法人にした<sup>53</sup>。本校は高等女学校を卒業した未婚女性40名を募集し、一年間主婦としての修業をさせることを目指していた。この学校の設立目的は、賢母良妻養成と軍国の女性養成にあり、教育方針は、全ての科目を實際生活に即するように教育し、理論より実践、学ぶよりも行動、学科よりも精神薫陶であった。教授陣には、塾長に永河(朴)仁徳、専任講師として方永福、講師として淑明専門教授豊山泰治(金浩植)、清和女塾講師津田節子、清和女塾講師大橋壽子、書家金克培、精華医院長張文卿、梨花高女講師高松キシ子、著述家巖興燮が名前を連ねていた<sup>54</sup>。

この徳和女塾は、緑旗連盟が運営する清和女塾と名前からしてよく似ており、教育内容も高等女学校を卒業した未婚女性を一年間指導し賢母良妻そして軍国の母を養成するという目的も共通である。また清和女塾の津田節子や大橋壽子が教授陣に参加していたこともあり、清和女塾の姉妹校的立場にあったことは否定できない。

徳和女塾と清和女塾そして緑旗連盟との深い関係を示すのは、卒業生の答辞である。第1回卒業式で石原照子(朝鮮人、女子医専入学予定)は15人の卒業生を代表して次のように述べている。

私達ハ徳和ニ入り多クノコトヲ学ビ得マシタ。裁縫モ手芸モ料理モソシテ栄養モ礼儀作法モイロイロナコトヲ学ビマシタ。(中略)ソレカラ緑旗連盟ヲ知り緑旗ノ一員ニ加エテ戴イテ日本ノ国ノオ勉強ヲサセテ戴イタコトハ最モ大キナ喜ビノツデ御座居マシタ。始メテ修身ノ時間ニ津田先生カラ緑旗ノコトヲ伺ッタ時ハ半分判ル様ナ分ラナイ様ナ気持チデゴザイマシタ。ソウロデハ云フモノト反発シタイ様ナ誰モガ言フ、オキマリノ話、聞キタクモナイトイフ様ナカタクナノ気持デシタ。然シ其レカラ週毎ノ修身ノ時間ニ先生ノ熱誠アフルルオ話ヲ伺ッタリ緑旗ヲ読ンダリ毎日御一緒ニ神宮ニオ詣リシテオ話ヲ伺ッタリシテ居ル中ニ私モコンナニ真面目ニ真心カラ御国ヲ想ヒソシテ朝鮮ヲオモッテ下サル方モイッラシャルノカト、今マデ固クトザシテ居タ心ノ扉ガヒラケテ行クヨウナ気持デシタ。(中略)殊ニ戦フ日本ニ於ケル半島ノ娘トシテノ生キル道ヲコンコトオサトシ下サイマシタ。(中略)今ハ何時デモ御国ノ為ニ大君ノ為ニ泣ケル気持デス<sup>55</sup>。

<sup>52</sup> 『毎日新報』1941年2月23日付。

<sup>53</sup> 『毎日新報』1941年3月23日付。

<sup>54</sup> 「朝鮮・内地・海外に流れている話題」、『三千里』136、1941年6月。

<sup>55</sup> 「徳和女塾卒業式挙行二関スル件」、『京鐘警高秘第二〇九号』、昭和17年3月20日、国史編纂委員会韓国史データベース。ちなみにこの日の列席者の中に、3・1運動の予審裁判の時の検事山澤佐一郎が検

卒業式の答辞という美辞麗句と誇張に彩られている性格を差し引いても、この答辞を読む限り、徳和女塾は緑旗連盟の内鮮一体化運動の中にしっかりと位置づけられていること、毎週の修身の授業や朝鮮神宮参拝などのカリキュラム、そして津田節子や大橋壽子ら講師の努力が相まって、朝鮮の知識層女性を皇国臣民に、軍国の母として養成しようとした目的は一応達成されていると見られる。

ところで徳和女塾の創立者である朴仁徳は、自分の余生を捧げる仕事として人間教育を中心とした女性教育を考えた。人間教育とはこの事業の中ではすなわち賢母良妻を養成することになるが、それに関して、朴仁徳は次のように述べている。

家庭が健全であり明朗であれば子供も強く健全なものになる。賢母良妻こそは国の力を左右するといっても過言ではない程大きな力を持っているのであります。(中略) 所謂新しい女性達は在来の封建主義的な女性圧制の殻を破って出るに忙しく女として当然持つべきものまでも棄てたの感があります。(中略) 私は4、5年前から考えていました。自分の余生を捧ぐべき事業をこの女性教育に求めようと思いました。そして女学校と家庭との橋渡しになるべき人間教育を中心とした何か塾見た<sup>7</sup>ようなものを作るべきだと考えました。(中略) 塾の指導法精神は簡単に申しまして婦徳の涵養、家道の修練をさして賢母良妻を養成するのが目的でありますから全ての科目を實際生活に即するようにしていますし、理論より実践に、学ぶよりもおこなうに、学科よりも精神薫陶に置いてあります。(中略) 微力ながら立派な軍国の女性をつくりあげるのに聊かの力でも尽くし得ようものなら本望であります<sup>56</sup>。

賢母良妻が国家を左右する力を持っているから、それを養成するという。さらに新女性の欠点に触れ、女性抑圧の制度を破るのに忙しく、人間として当然もつべきものを捨ててしまったので、これからの女性教育は人間教育をする必要があるという。そのうえ、精神を陶冶することで軍国の母を作ることに微力を尽くしたいとみずから述べている。

しかしそれまで賢母良妻教育とは相容れない教育を受け、人生行路から考えてもそれになじめない朴仁徳が、なぜ、賢母良妻という新しい外皮をまとった近代的家父長制の理念を追求するようになったのか、またそれを教育の目標にすることは、総督府の政策に合致することであり、協力することになるのをいかに考えたのか。緑旗連盟との同盟的關係は、朴仁徳が自分の事業をやり遂げるための戦略であったのか。彼女の書いたどの文書の中でもそれらの点を明らかにしていない。いずれにしても、この徳和女塾の開校を前後して、朴仁徳の総督府への協力は一層深まっていった。

---

事正として臨席しているのがわかる。

<sup>56</sup> 「強き家庭の建設—わが塾の精神」, 『東洋の光』5-3, 1943年8月。

## 第2節 皇民化運動

1941年8月、朝鮮人の戦争協力を先導するため臨戦対策協力が組織されると、朴仁徳は、常務委員になった。女性では委員として金活蘭も名前を連ね、毛允淑、崔貞熙、李淑鍾、宋今璇等も会員になった。その主催下で大講演会が開催されると、演士としてかり出され、「勝戦の道はここにある」などの講演を行った。

同年9月にこの臨戦対策協力会と興亜報国団が統合されて、朝鮮の有力者を最大限網羅した朝鮮臨戦報国団が結成されるにあたり、朴仁徳は、評議員に名を連ねた。その活動の一環が債権消化運動であり、9月9日京城の目抜き通りで愛国特別債権の売り出しが行われたが朴仁徳も鍾路和親前でこの運動に参加した<sup>57</sup>。

さらに、朝鮮臨戦報国団婦人隊が組織され、朴仁徳も委員に加わった。この団体は、当時名前が知られている各界の女性指導者をほとんど網羅しており、金活蘭・任淑宰・兪珏卿・毛允淑なども参加した。彼女たちは、大東亜戦争完遂のための時局婦人講演会巡回講演を行う常連講師になった。たとえば、1942年シンガポールを陥落させると、シンガポール攻略大講演会が開催され、朴仁徳は「東亜連盟と半島女性」という題で演説し、「我々自らが指導者となり、または我が子女たちを育て、彼らを指導者にしましょう。我々の前に幾千万の人々が過ぎていき、将来も幾千万名が過ぎていこうとも、唯一我々に今日このような機会がやってきたのは、必ず大きな意味があることです。半島の1200万名の女性は遺憾なく大東亜建設に一つの役割をしましょう」と呼びかけた<sup>58</sup>。

1942年、来る1944年から朝鮮にも徴兵制の施行が行われることが決定された。これに呼応し徴兵制を歓迎する婦人講演会が、朝鮮臨戦報国団婦人部や監理教会婦人部主催で行われ、朴仁徳は金活蘭とともに、活発な講演活動を展開した。両団体はキリスト教女性が中心になって、講師も重なっている場合が多くみられる。

たとえば、臨戦報国団婦人部主催「軍国の母座談会」は京城府内鍾路キリスト教青年会館内の朝鮮臨戦報国団会議室で、林孝貞・盧天命・朴仁徳・高鳳京・任淑宰・崔貞熙・毛允淑・許河伯等の参席で開催され、徴兵制実施に対する決心と準備を話し合った<sup>59</sup>。キリスト教京城教区監理教団主催の徴兵制実施記念婦人講演会も継続して行われ、徴兵制に対する婦人の認識を高めるための啓蒙を行ったが、朴仁徳は「徴兵制度実施と半島婦人の覚悟」<sup>60</sup>、「徴兵制実施に際して婦女の期待」<sup>61</sup>という題目で講演した。

また、学徒動員のための朝鮮女性教化講演会講師として精力的な活動も行い、戦争の泥沼化

<sup>57</sup> 「朝鮮臨戦報国団ノ債権消化運動ニ関スル件」、『京高秘第2553号』、昭和16年9月9日。

<sup>58</sup> 「東亜黎明と半島女性」、『大東亜』14-3、1942年3月。なお、この筆者は京城徳和女塾校長永河仁徳となっており、彼女の創氏が永河であることがわかる。この氏は父の名前朴永河から取った。

<sup>59</sup> 『毎日新報』1942年5月26日付、5月31日付、6月1日付。

<sup>60</sup> 『キリスト教新聞』1942年6月3日付。

<sup>61</sup> 『キリスト教新聞』1942年6月10日付。

とともに男性の労働力不足への対応として行われた女性の勤労働員にあたっては、その指導のための啓蒙講演会が行われたが、そこでも婦人層に檄を飛ばした<sup>62</sup>。

以上のように、朴仁徳は植民地末期において、主に講演会講師として総督府の政策に協力を行ったが、その行動が後に「親日派」の烙印を押されることになる。

## おわりに

従来、研究が少なかった朴仁徳は教育活動・農村女性のための啓蒙運動・職業女性組織運動などの新女性実践家として注目すべきものがある。早くに梨花学堂において「近代」的思考の土台を学び、その後アメリカに留学し、さらには欧米各国の女性たちの具体的な有り様を見聞し、「近代」が女性にもたらした生活の変化を体現した。離婚後の社会的な冷視の中でも、着実に自分の仕事を継続したという意味では希有な新女性でもある。新女性研究は「民族かジェンダーか」という固定的枠組みを設定すると、おのずから実態に近づくことができない問題をかかえることになる。朴仁徳研究は、新女性研究を固定的枠組みから解き放ち、その時代を生きる新女性たちの矛盾と葛藤に満ちながら、真摯に生きた実態を追求する上で出発点になるであろう。

1960年代に朴仁徳は実業専門学校を設立し、持論であった女性に経済力をつけるための職業教育に心血を注ぐが、後に「親日派」研究の広がりとともに、植民地末期の彼女の行動が親日派として糾弾され、もう一度社会から「埋葬」され、研究の対象とはなつてこなかった。朴仁徳を対象に「親日派」行為を糾明する以外の研究が行われるようになってからまだ日が浅い。そのために彼女がなぜ「親日派」的行動を取るようになったのか、史料的にも確認できない部分が多い。本稿ではその意味で不十分な解明に終わっているところが多々あるが、現在の時点でまとめられることを記せば次のようになる。

朴仁徳の行動は、独立運動から親日派へという正反対の軌跡を描いたが、その転換の背後には、植民地朝鮮におけるジェンダーの問題と民族そして親日の問題が複雑にからまっている。彼女は一貫して強いジェンダー意識を持ち続けた。子供の時、女兒では書堂に入れないため男装して通ったことや女性から離婚を要求したことで社会的バッシングを受けたことなど、その経験からジェンダー意識を強めざるをえなかった。彼女が実践した農村生活改善のための対象は農村婦人たちである。ジェンダーの問題と植民地社会の矛盾が最も集中しているところが農村女性だからであった。

朴仁徳の評価において最も問題とされている「親日問題」は、彼女の人生の中でジェンダーや自己実現の要求と密接にからみあい、分離することができない。農村女性生活改善運動の具

<sup>62</sup> 「婦人層に檄、名流婦人たちが勤労啓蒙」、『毎日新報』10月7日付。

体的方向が総督府の農村振興運動の方向と一致していたことや、女性のための実業学校を作るという年来の夢の実現が緑旗連盟と深く結びついた要因と考えられる。

女性も職業を持ち、自己実現をするべきだという考えは、朴仁徳の経験に根ざした信念であり、彼女が学んだアメリカの教育で培われた思想でもあった。彼女の自己実現の最終目標は、女性のための実業学校を作ることであった。それが朴仁徳にとって、「近代」にいち早く接した新女性としての自分が民族のために仕事をする武器と考えた。その実現の場を得るために緑旗連盟への接近も厭わなかったと推測できる。

また、離婚という経験のため、家父長的習慣が残存している社会では、彼女が自身の追求する仕事をするには多くの障壁が立ちはだかった。それは一般社会はもちろん、彼女が強く帰属意識を持っているキリスト教社会においても同様であり、彼女が精魂を傾けた農村女性啓蒙運動を中断してもアメリカに向かうことになったのも、そこに原因があった。

したがって、朴仁徳の「親日」行為は、「ジェンダー」と「民族」に深く関わり、その延長線上で起こった行動である。1944年にそれだけ心血を注いだ徳和女塾が、総督府の命令で閉鎖された時の朴仁徳の衝撃は大きかったが、戦争が泥沼化していく状況のなかで、「親日」行為を中断することはすでに許されなかった。